

(3) 爬虫類

爬虫類は日本にはカメ目 13 種 2 亜種、有隣目 83 種 10 亜種が生息し、埼玉県からはこれまでにカメ目 5 種、有隣目 11 種、計 16 種が記録されている。本書を刊行するにあたり、そこから外来種（ミシシippアカミミガメ、カミツキガメ）を除いた 14 種を対象に本県における生息状況を調査した結果、その約 86%にあたる 12 種をレッドリスト掲載種とした。

これまでの爬虫類の掲載種数の変遷をみると、初版は 8 種、改訂版の 9 種、前版での 12 種、そして本書の 12 種と、絶滅を危惧すべき状況にある爬虫類は確実に増加し、ほとんどが掲載種となっている。特にシマヘビは前版までは未掲載であったが、調査によって著しい減少がみられ、初掲載となった。ニホンカナヘビに関しても、都市化が進行した県南部、東部では生息適地の減少と分断化がみられ、初掲載とした。それに対し、前版で掲載されているクサガメ、ニホンヤモリの 2 種を未掲載とした。クサガメは正田ら（2010）により江戸後期に国内に持ち込まれたとされていることから、外来種として扱うこととした。ニホンヤモリは調査の結果、県内広く生息していることが明らかとなったためランク外とした。

爬虫類（特に有隣目）は、低地帯から台地・丘陵帯にかけては都市化の進行や宅地・工業団地・幹線道路造成など大規模開発による生息地の減少・消滅、カエルなど餌資源の減少などもあり、個体数は減少していると考えられ、県南部、東部ではその傾向が特に顕著である。しかし、爬虫類自体が自然環境下でまともな発見されることは稀であり、野生の生息状況を正確に把握することは難しい。野生下の寿命は判明していない種も多く、繁殖場所もわかりにくいいため、個体群の規模や世代交代がどのようにおこなわれているか明らかになっていない種群もある。したがって、気づかないうちに個体群が消滅している場合も考えられ、個体数の多い台地・丘陵帯であっても生息状況のわずかな変化にも注意を向けておく必要がある。

また、低山帯から山地帯にかけての減少要因としては、森林伐採、新たな林道造成などによる乾燥化が指摘されている。人目につきにくいシロマダラやタカチホヘビに対するこれらの影響の評価は難しいが、特にタカチホヘビはその生態から環境変化の影響を受けやすい種と考えられる。

カメ目に関しては、ニホンイシガメ、ニホンスッポンを掲載したが、両種とも情報不足とした。過去の記録、調査の結果、研究結果から本県での在来分布に関して疑問があり、引き続き調査が必要である。また、ニホンスッポンに関しては養殖個体が逸出した可能性もあり、遺伝子解析など最新の研究結果が待たれる。

[付記] 次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、千石ら（1996）および環境省（2014）を参照した。また、種数については日本産爬虫両棲類標準和名リスト（日本爬虫両棲類学会 2016 年 11 月 27 日版）を参照した。

科名・目名	有鱗目タカチホヘビ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
〔和名〕	タカチホヘビ				
〔学名〕	<i>Achalinus spinalis</i> Peters	指定状況			-
【形態】	全長 30～60cm				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	低地から山地の倒木や石の下などに生息し、薄暗く湿気のある森林を好む。乾燥に弱く、ミミズを餌とするため、湿り気のある地中に潜っていることが多い。雨の夜間に林道上で採餌活動していたり、工事等の掘削などにより地中から発見される例があるが、普段人目にふれることはめったにない。				
【県内での生息状況】	低地帯から山地帯まで生息しているが、森林環境に依存するため、分布の中心は台地・丘陵帯から山地帯である。低地帯では確認例はわずかで個体数は少ないと考えられる。台地・丘陵帯では宅地、工業団地、道路造成などの大規模開発、低山帯や山地帯では林道造成、森林伐採などは生息適地の分断化、乾燥化につながり、個体数の減少を招く。夜行性であること、地中に潜ること、目立たない色彩などから生息記録は少ないが、希少性の程度とは必ずしも合致しない。				
【特記事項】					

科名・目名	有鱗目ナミヘビ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
〔和名〕	シマヘビ				
〔学名〕	<i>Elaphe quadrivirgata</i> (Boie)	指定状況			-
【形態】	全長 80～200cm				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	低地から山地まで広く生息し、日当たりのよい水田、草むら、畑地、池沼の周辺などを好む。餌はカエル、トカゲ、鳥類、哺乳類など食性は広いが、カエルに依存する傾向が強い。昼行性で採餌や日光浴のため水田やその周りでみかけることが多く、人目にふれやすい種である。				
【県内での生息状況】	低地帯から山地帯にかけて生息している。普通にみられる種とされ前版ではランク外だったが、近年、関東平野とその周辺では減少が著しい。近県の東京都や千葉県でも減少が指摘され、県内でも個体数は少ないと考えられる。餌資源と生息適地が多い台地・丘陵帯で生息記録が少なく、特に秩父地方で少なかった。低地帯での生息記録は加須低地を中心にみられたが、水田の減少、圃場整備、水路のコンクリート化などによりカエルなど餌資源の減少が顕著である。				
【特記事項】	ヤマカガシとは餌資源、生息適地が競合し、個体数が少ない要因の可能性はある。近県ランク：東京都（本土）CR～NT（地域がある）、千葉県 VU				

科名・目名	有鱗目ナミヘビ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
〔和名〕	シロマダラ				
〔学名〕	<i>Dinodon orientale</i> (Hilgendorf)	指定状況			-
【形態】	全長 30～70cm				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	低地から山地まで生息し、人家の周辺から林地まで広く生息している。夜行性で普段は石の隙間などに隠れているため、隠蔽性が高く人目につきにくい。餌は爬虫類に依存し、トカゲ、カナヘビ、小型のヘビなどを好む。				
【県内での生息状況】	低地帯から山地帯まで広く生息している。分布の中心は台地・丘陵帯から低山帯にかけてで、外秩父山地とその周辺での生息記録が多い。低地帯での生息記録はきわめて少ないが、川口市での確認事例があるなど、都市化の進行した県南部、東部でも石垣などの隠れ家や日陰になる林地などの環境が存在していれば生息の可能性はある。隠蔽性が高いため、記録の少なさほど稀な種とは考えられないが、宅地、工業団地、道路造成などの大規模開発は、餌資源や棲みかの減少となり、特に台地・丘陵帯では影響が大きい。				
【特記事項】					

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・甲殻類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

科名・目名 有鱗目ナミヘビ科
 (和名) **ジムグリ**
 (学名) *Euprepiophis conspicillatus* (Boie)
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -
 指定状況 -

【形態】 全長 70～100cm

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 低地から山地の林地や畑地などに生息し、「地潜り」の名の通り地中の穴によく潜る。冷涼な環境を好み、餌資源をネズミ類に依存しているため、面積の広い森林が必要となる。気温の高い夏季は活動が鈍化し、春と秋は活発に活動する。

【県内での生息状況】 低地帯から山地帯まで生息しているが、森林環境に依存するため、分布の中心は台地・丘陵帯から山地帯である。低地帯では生息適地が少なく分断化されているため稀であり、特に開発が進んだ県南部や東部では極めて稀である。本種の安定した生息環境として、できる限り広い面積の森林の維持と餌資源の確保が必要となる。台地・丘陵帯での宅地・工業団地・道路造成といった大規模開発、低山帯や山地帯での林道造成、森林伐採などは、乾燥化や餌資源の減少につながり個体数の減少を招く。

【特記事項】 腹板に斑紋がなく、赤茶一色の個体をアカジムグリと呼んでいる。

科名・目名 有鱗目ナミヘビ科
 (和名) **ヒバカリ**
 (学名) *Hebius vibakari vibakari* (Boie)
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -
 指定状況 -

【形態】 全長 40～60cm

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 低地から山地まで広く生息している。水辺をよく好み、水田、畑地、湿地、池沼の周辺などでみられる。餌としてカエル、ミミズ、魚類を好むが、カエルに依存する傾向が強い。夕方から早朝にかけてに活動し、小型で地味な体色のため、人目にふれにくい種である。

【県内での生息状況】 低地帯から低山帯まで広くに生息している。餌資源をカエル類に依存するため、水田の減少は個体数の減少に直結する。特に低地帯では生息適地の局所化が顕著な県南部、東部で稀である。分布の中心である台地・丘陵帯も水田の減少などにより餌資源が減少し、宅地・工業団地・道路造成など大規模開発により、生息適地の分断化や消失がみられ、個体数の減少傾向は続くと考えられる。しかし台地・丘陵帯ではシマヘビほど顕著な減少傾向を示していない。

【特記事項】

科名・目名 有鱗目ナミヘビ科
 (和名) **ヤマカガシ**
 (学名) *Rhabdophis tigrinus* (Boie)
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -
 指定状況 -

【形態】 全長 70～150cm

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 低地から山地まで広く生息している。水田、河川敷、林地、畑地、湿地、池沼の周辺など多様な環境でみられる。昼行性であり、採餌や日光浴などの活動は人目につきやすい。食性はカエル類をよく好み、大型のヒキガエルまでも餌にする。

【県内での生息状況】 低地帯から山地帯まで広く生息している。分布の中心は水田や雑木林の多い台地・丘陵帯で、河川敷でもよくみかける。餌資源をカエル類に依存するため、水田の減少は個体数の減少に直結し、特に低地帯では生息適地の局所化が顕著な県南部、東部で稀である。台地・丘陵帯も水田の減少に加え宅地・工業団地・道路造成など大規模開発により、生息適地の分断化や消失がみられるが、個体数の減少はシマヘビほど顕著でないと考えられる。

【特記事項】 以前は台湾産、中国大陸産との亜種関係であったが、現在は別種として分類された(TAKEUCHI et al, 2012)。

科名・目名	有鱗目トカゲ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
〔和名〕	ヒガシニホントカゲ	指定状況			
〔学名〕	<i>Plestiodon finitimus</i> Okamoto et Hikida	-			
【形態】	頭胴長 6～9.5cm				
【国内分布】	北海道、本州（東海、北陸以東）				
【主な生息環境】	低地から山地まで広範囲に生息し、林地から開けている林道沿いや、川辺などの日当たりが良い場所に昼間みられる。寺社の石垣など隠れ場所や日光浴に適している環境があれば、都市部の住宅地でもみられる。				
【県内での生息状況】	低地帯から山地帯まで広くに生息している。低地帯では、都市化等が進行した県南部、大規模開発が盛んな県東部で個体数が減少している。都市部では広い社寺林を有す寺社周辺などに限定され、今後、生息適地の局所化が一層顕著になると考えられる。台地・丘陵帯でも河川改修、宅地や工業団地の大規模開発などの影響による個体数の減少が懸念される。				
【特記事項】	以前はニホントカゲとされていたが、2012年に新種として分類された（OKAMOTO & HIDAHA, 2012）。				

科名・目名	有鱗目ナミヘビ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
〔和名〕	アオダイショウ	指定状況			
〔学名〕	<i>Elaphe climacophora</i> (Boie)	-			
【形態】	全長 110～200cm				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	低地から山地まで広く生息し、森林、水田、住宅地まで様々な環境に適応している。樹上性が強く、鳥類のヒナや卵、ネズミ類を好み、幼蛇はカエルやトカゲを餌とするため、これら餌資源が豊富な里山環境は生息適地といえる。昼行性で人家（特に木造家屋）にもよく棲みつき、人目にふれやすい種である。				
【県内での生息状況】	低地帯から山地帯まで広く生息している。低地帯では、都市化等が進行した県南部、大規模開発が盛んな県東部は、建物構造の鉄骨化、鉄筋化により生息環境や餌資源が減少している。緑地公園、屋敷林や社寺林に囲まれた住宅や寺社のなど存在により辛うじて個体群が維持されていると考えられる。生息適地の多い台地・丘陵帯でも大規模開発の影響だけではなく、小規模でも道路の舗装化や直線化などによりロードキルを誘発し、個体数減少につながっていると考えられる。				
【特記事項】					

科名・目名	有鱗目クサリヘビ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
〔和名〕	ニホンマムシ	指定状況			
〔学名〕	<i>Gloydius blomhoffii</i> (Boie)	-			
【形態】	全長 40～65cm				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	低地から山地まで広く生息し、森林とその周辺の水田、湿地、池沼、河川敷から人家近くまで多様な環境でみられる。餌はネズミやカエル類をはじめ、小型の脊椎動物を食べる。主に夜行性であるが、日光浴など昼間活動することもあるため、身近な環境でもみられる。				
【県内での生息状況】	低地帯から山地帯まで広くに生息している。分布の中心は水田や雑木林など多様な環境が存在する台地・丘陵帯で、河川敷でもよくみかける。低地帯での記録は少なく、加須低地、荒川低地でみられる程度である。都市化の進行が著しい県東部の中川低地では近年確認されていない。比較的よくみられる台地・丘陵帯も宅地・工業団地・道路造成など大規模開発により、生息適地の雑木林やその周りの水田の減少に加え、河川改修の影響もあり減少傾向にあると考えられる。				
【特記事項】	強い毒を持つため、緑地公園などでは注意喚起の看板が設置されている。				

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

科名・目名 カメ目イシガメ科
埼玉県(2018) DD 環境省(2014) NT

〔和名〕 **ニホンイシガメ**

〔学名〕 *Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel) 指定状況 -

【形態】 背甲長 オス最大 14cm 前後 メス最大 21cm 前後

【国内分布】 本州（関東以西）、四国、九州

【主な生息環境】 河川中流域を中心に、上流域の山間部から下流域の都市化を免れている里地に及び、水路、池沼、湿地にも広く生息している。産卵や採餌など水辺から陸に移動して活動することから、河川敷や池沼の周辺環境も重要となる。河川や水路の直線化や三面護岸化は影響が大きい。

【県内での生息状況】 台地・丘陵帯の河川中流域は西日本で多く見られる生息適地の環境に類似しているが、記録はごくわずかであり、確実な繁殖は確認されていない。1978年に刊行された埼玉県動物誌においても移入の可能性が示唆され（須甲, 1978）、近年の記録も繁殖に適さない低地帯の都市部が中心のため、本県では移入の可能性はある。また、一部の資料ではクサガメとの誤同定もみられるなど、信憑性に乏しい記録も散見される。

【特記事項】 全国各地で外来種の影響が報告されている。ミシシippアカミミガメとの生息地の競合やアライグマによる捕食などにより個体数の減少がみられる。また、海外への大量移出や爬虫類即売イベント等での大量販売など、採集業者の乱獲も個体数減少につながっている。

科名・目名 カメ目スッポン科
埼玉県(2018) DD 環境省(2014) DD

〔和名〕 **ニホンスッポン**

〔学名〕 *Pelodiscus sinensis* (Wiegmann) 指定状況 -

【形態】 背甲長 最大 35cm 前後 オスはやや大型

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 河川中・下流部、流れの緩やかな水路、池沼などに生息している。砂泥質の河床を好み潜航して活動しているため、人目につきにくい。河川下流部など人為的な影響を受けやすい環境に生息するため、河川や水路の直線化や三面護岸化は脅威である。

【県内での生息状況】 台地・丘陵帯から低地帯にかけて主に分布すると考えられるが、生息記録が少なく局所的である。秩父地方で荒川において繁殖の可能性はあるが、各地で食用目的の養殖がおこなわれていたことから、外来起源の可能性も否定できない。低地帯では漁獲や魚類調査で確認されることがある。

【特記事項】 かつて全国各地でおこなわれていた養殖事業が廃れ、そこから逸出した個体も多かったと推察されるため、元々の在来個体群の分布がはっきりしていない。

科名・目名 有鱗目カナヘビ科
埼玉県(2018) RT 環境省(2014) -

〔和名〕 **ニホンカナヘビ**

〔学名〕 *Takydromus tachydromoides* (Schlegel) 指定状況 -

【形態】 頭胴長 5～7cm

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 低地から山地にかけて広範囲に生息するが、低地や丘陵地で多く見られる。草むらなど日当たりのよい場所を好み、公園の緑地、水田の畦、人家の生け垣、畑地など人為的な環境にも適応している。

【県内での生息状況】 台地・丘陵帯を中心に、低山帯から低地帯まで広く分布しているが、緑地面積の減少による生息適地の減少、道路等造成に伴う生息地の分断などによって、個体数の減少がみられる地域がある。都市化の進行している県南部、大規模開発が盛んな県東部ではこの傾向が顕著である。

【特記事項】